

# 牛田智大

## ラフマニノフを弾く

*Tomoharu Ushida plays RACHMANINOV*

2023年6月6日(火) 19:00

サントリーホール

7:00p.m., Tuesday, June 6, 2023 at Suntory Hall

ピアノ：牛田智大 Tomoharu Ushida, Piano

指揮：飯森範親 Norichika Iimori, Conductor

管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団 Tokyo Philharmonic Orchestra

主催：ジャパン・アーツ

協力：ユニバーサル ミュージック

---

---

# Program

---

---

ボロディン：歌劇「イーゴリ公」より

“ダツタン人の娘たちの踊り～ダツタン人の踊り”

Borodin: Dance of the Polovtsian Maidens, Polovtsian Dances. from “Prince Igor”

ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

Rachmaninov: Rhapsody on a Theme of Paganini, Op.43

\* \* \* \* \*

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第3番 ニ短調 Op.30

Rachmaninov: Piano Concerto No. 3 in D Minor, Op.30

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・タント

1st Mov.: Allegro ma non tanto

第2楽章：インテルメッツォ、アダージョ

2nd Mov.: Intermezzo. Adagio

第3楽章：フィナーレ、アツラ・プレーヴェ

3rd Mov.: Finale. Alla breve

---

## ラフマニノフ・イヤー2023 生誕150年コンサート

---

6月7日(水)	サントリーホール	上原彩子&松田華音 ラフマニノフ ピアノ・デュオ・リサイタル
6月26日(月)	東京芸術劇場コンサートホール	ラハフ・シャニ指揮 ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団 (ピアノ:藤田真史)
6月30日(金)	サントリーホール	山田和樹指揮 バーミンガム市交響楽団
9月13日(水)	東京オペラシティ コンサートホール	ミハイル・プレトニョフ ラフマニノフピアノ協奏曲全曲演奏会〈第一夜〉
9月21日(木)	東京オペラシティ コンサートホール	ミハイル・プレトニョフ ラフマニノフピアノ協奏曲全曲演奏会〈第二夜〉
9月17日(日)	サントリーホール	阪田知樹 ラフマニノフ ピアノ協奏曲全曲演奏会
10月18日(水)	サントリーホール	バーヴォ・ヤルヴィ指揮 チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団 (ピアノ:ブルース・リウ)
12月17日(日)	東京文化会館 小ホール	福岡洸太郎 ピアノ・リサイタル
2024年1月9日(火)	東京芸術劇場	トマーシュ・ブラウネル指揮 ブラハ交響楽団 ピアノ:牛田智大

---

---

---

# Program Notes

---

---

寺西基之 (音楽評論家)

---

## ボロディン: 歌劇「イーゴリ公」より“ダットン人の娘たちの踊り～ダットン人の踊り”

---

19世紀後半にロシアの5人の作曲家で結成された「力強い仲間たち(5人組)」は、民族主義的な芸術音楽の創造をめざしたことで知られる。アレクサンドル・ボロディン(1833-87)はその5人のうちのひとりで、血筋がアジア系だったため、作風にも広大なロシアにおけるアジア的側面が打ち出されている。中世ロシアの武勲詩《イーゴリ遠征譚》などに基づいてボロディン自身が台本も書いたオペラ「イーゴリ公」もまさにそうした作品だが、未完のまま彼が死去したために、リムスキー＝コルサコフとグラズノフの手で完成された。イーゴリ公と東方の遊牧民族ボロヴェツ人の戦いを描いたオペラで、音楽もロシア的な色彩と東洋風のエキゾティズムが溶け合う独特の魅力を持っている。本日演奏される2曲はいずれもボロヴェツ人の陣営で踊られるもので、いかにも東洋的なムードと土俗的な力感を併せ持つ曲となっている(なおボロヴェツ人はダットン人と混同され、曲題の訳も“ダットン人”として定着してしまい、今日でも未だその表記が広く用いられている)。

---

## ラフマニノフ: パガニーニの主題による狂詩曲 Op.43

---

ロシアの作曲家で、超絶的なピアノの名手としても知られたセルгей・ラフマニノフ(1873-1943)は、チャイコフスキーを尊敬し、彼に連なるロシア的な情緒の色濃いロマン的な作風を追求し続けた。ロシア革命を機に母国を捨て、後半生はアメリカや西欧で過ごしたが、そのような彼の作風は基本的に生涯変わることがなかった。1934年に書かれたこの「パガニーニの主題による狂詩曲」も後半生の所産だが、やはり濃密なロマン性とロシア的な情感が全体を支配している。すでにロマン派の時代は終わって新しいモダンな音楽が追求されていた時代の中でこうした作風を貫いたことに彼の保守的な性格が現れているが、逆にみれば時代の流れに抗してまでロマン的伝統を守ろうとしたラフマニノフの姿勢には、単に時代錯誤と片付けられない決然としたものがあるともいえるだろう。大ピアニストでもあったラフマニノフらしいピアノの技巧性が存分に生かされた名作である。

全体は、19世紀前期のヴァイオリンの名手パガニーニの「無伴奏ヴァイオリンのためのカプリス」の第24曲の主題に基づく変奏形式で書かれているが、“狂詩曲”の題に相応しく、華麗な名技性から甘美な情感(叙情的な第18変奏は特に有名)までの激しい起伏と変化に富んだ発展

が繰り返されていく。主題提示の前にまず管弦楽による第1変奏を置くという工夫が興味深く、また副主題としてグレゴリオ聖歌の“怒りの日”の旋律を第7変奏、第10変奏、コーダに引用している点も注目される。“怒りの日”はラフマニノフのみならず、ベルリオーズをはじめとする多くの作曲家が死を暗示する主題として用いた旋律だが、この「狂詩曲」ではその引用が曲の展開に劇的緊張を効果的にもたらしめており、特にパガニーニ主題と組み合わせられて壮大なクライマックスを築くコーダでの用法は鮮やかというほかない。初演は1934年11月7日にアメリカのボルティモアにおいて、作曲者自身のピアノ、レオポルト・ストコフスキー指揮のフィラデルフィア管弦楽団の演奏によってなされている。

---

## ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第3番 ニ短調 Op.30

---

前述したようにラフマニノフは当りきっての大ピアニストでもあり、ロシア的な情緒とピアノの鮮やかな技巧性とが結び付いた彼のピアノ曲には、ピアノの名手ならではの雄弁な表現と妙技が随所に示されている。ピアノ協奏曲第3番はまさにそうしたラフマニノフの特質がいかに発揮された傑作である。彼は1904年に作曲に専念するためにドレスデンに移り住み、交響曲第2番や交響詩「死の島」などの作品を生み出すなど、意欲的に仕事に取り組んだ。この協奏曲第3番もドレスデン時代の創作力の高まりの中で1907年頃に構想されたもので、1909年にモスクワに戻ってから本格的な作曲に取り掛かっている。彼は1909年秋から翌年にかけてアメリカへの演奏旅行を企画しており、アメリカで自らの独奏で初演するための作品としてこの協奏曲を書き進めていった。曲は出発前の9月にひととおり出来上がったが、旅行中にも手直しがなされ、アメリカに着いてから最終的な完成をみたようだ。初演は1909年11月28日にニューヨークにおいてラフマニノフ自身のピアノ、ウォルター・ダムロッシュの指揮するニューヨーク交響楽団によって行われている。

曲のスタイルはロマン派の協奏曲様式を受け継いだもので、ロシア的な情感を濃厚に打ち出したロマンティックな作風という点では前作の有名なピアノ協奏曲第2番と共通するが、第2番よりもさらにピアノの技巧的な難しさが増し、ピアニストにとって難曲中の難曲に挙げられる作品となっている。

第1楽章: アレグロ・マ・ノン・タント、ニ短調。両手ユニゾンで簡素な主題に始まるが、叙情的な第2主題や劇的な展開部など全体は起伏に満ちた発展を繰り返す。

第2楽章: インテルメッツァ、アダージョ、イ長調。メランコリックな暗い雰囲気を持つ幻想的な緩徐楽章で、次第に動きを増していく。最後はピアノのカデンツァ風の華麗なパッセージを伴う経過部分によってそのまま休みなく次の楽章に続く。

第3楽章: フィナーレ、アツァ・プレヴェ、ニ短調。活力に満ちた主題に始まる技巧的なフィナーレで、情緒溢れる第2主題とともに、変化に富んだ鮮やかな展開が織り成される。

---

## Profile



ともはる  
牛田 智大 (ピアノ)

Tomoharu Ushida, Piano

2018年第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。  
2019年第29回出光音楽賞受賞。

1999年福島県いわき市生まれ。6歳まで上海で育つ。  
2012年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少(12歳)でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。これまでにベスト盤を含む計9枚のCDをリリース。2015年「愛の喜び」、2016年「展覧会の絵」、2019年「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」、2022年の最新CD「ショパン・リサイタル2022」は、連続してレコード芸術特選盤に選ばれている。

シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管(2014年)、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管(2015年/2018年)、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル(2016年)、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル(2018年)各日本公演のソリストを務めたほか、全国各地での演奏会で活躍。その音楽性を高く評価され、2019年5月プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管モスクワ公演、8月にワルシャワ、10月にはブリュッセルでのリサイタルに招かれた。

20歳を記念し2020年8月31日には東京・サントリーホールでリサイタルを行い、大成功を取めた。また2022年3月、デビュー10周年を迎えて開催した記念リサイタルは各地で好評を博した。人気実力とも、若手を代表するピアニストの一人として注目を集めている。



## 飯森 範親 (指揮)

Norichika Iimori, Conductor

桐朋学園大学指揮科卒業。ベルリン、ミュンヘンで研鑽を積み、これまでにフランクフルト放送響、ケルン放送響、チェコ・フィル、モスクワ放送響等に客演。01年、ドイツ・ヴェルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団音楽総監督(GMD)に着任し、日本ツアーも成功に導いた。国内では94年以来、東京交響楽団と密接な関係を続け、正指揮者、特別客演指揮者を歴任。06年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞、07年より山形交響楽団音楽監督に就任、芸術総監督を経て、22年より同楽団桂冠指揮者。パシフィックフィルハーモニア東京音楽監督、日本センチュリー交響楽団首席指揮者、いずみシンフォニエッタ大阪常任指揮者、東京佼成ウインドオーケストラ首席客演指揮者、中部フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者。23年4月より群馬交響楽団常任指揮者に就任。

オフィシャル・ホームページ <http://iimori-norichika.com/>



## 東京フィルハーモニー 交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra

1911年創立。日本で最も長い歴史をもち、メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。定期演奏会や「午後のコンサート」、オペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏の他、各地での訪問コンサートや海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を集めている。2020~21年には『情熱大陸』『BS1スペシャル』などのドキュメンタリー番組や国民的番組『NHK紅白歌合戦』にも登場。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千代市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的・創造的な文化交流を行っている。